美術館開館以来初の常設作品入れ替え・展示室増築・寄託作品展示

Arts Towada 十周年記念事業 十和田市現代美術館 常設作品入れ替え・新作公開のお知らせ

塩田 千春 / 名和 晃平 【2021年4月1日(木)より一般公開】 レアンドロ・エルリッヒ【2021年12月より一般公開予定】



塩田 千春《Uncertain Journey》 2017 Installation: wooden boats, red wool Mu.ZEE, Oostende, Belgium, Photo by Nele Thorrez JASPAR, Tokyo, 2021 and Chiharu Shiota group show: The Raft-Art is (not) Lonely ※参書作品



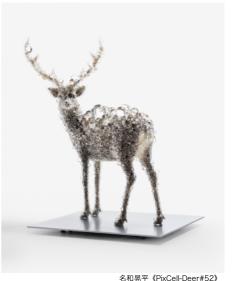
レアンドロ・エルリッと(Shikumen) 2013, Shanghai International Art Festival, Shanghai, China ・Leandro Erlich Studio

十和田市のまちを美術館にするプロジェクト"Arts Towada"が 10 周年を迎えたことを機に十和田市現代美術館は、開館以来初となる常設作品の入れ替え、展示室の増築、寄託された作品の展示を行います。

当館は、2008 年に常設作品を中心とし開館、2010 年には美術館の屋外のアート広場に作品を展開し、"Arts Towada"は完成いたしました。同時代性が求められる現代美術において、作品をアップデートしていくことを重要と考え、2021 年度以降新たな作品を3点公開いたします。

常設作品として、2021 年 4 月 1 日 (木) にはドイツ在住の塩田千春が十和田をモチーフにした新作を発表します。国内外の芸術祭や展覧会で公開された、船と糸を使用した作品のシリーズで、国内の公立美術館では初めての常設作品となります。12 月には、アルゼンチン出身のレアンドロ・エルリッヒの作品が新しい展示室とともに公開予定となります。さらに、十和田市現代美術館の新たな試みである、期間を限定して公開する寄託作品として、4 月 1 日 (木)より京都在住の名和晃平の作品が美術館内の新たなスペースに展示されます。

Arts Towada 十周年記念事業として 2021 年は、目まぐるしく変化していく現代とともに、美術館も時代を捉え、更新を続けていきます。



2018, mixed media h.2173 w.1896 d.1500 mm photo: Nobutada OMOTE | Sandwich Courtesy of SCAI THE BATHHOUSE

■常設作品

2021 年 4 月 1 日 (木) より一般公開 : 塩田 千春《水の記憶》 2021 年 12 月より一般公開予定 : レアンドロ・エルリッヒ《建物—ブエノスアイレス》

■寄託作品

2021年4月1日(木)~2023年9月まで展示予定 : 名和 晃平 《PixCell-Deer#52》

※作品入れ替えに伴い、キム・チャンギョム《メモリー・イン・ザ・ミラー》は展示室から撤去し、再展示までの期間、収蔵します。

お問い合わせ

十和田市現代美術館 広報:大谷(おおたに)

Tel. 0176-20-1127 Fax. 0176-20-1138 press@towadaartcenter.com www.towadaartcenter.com

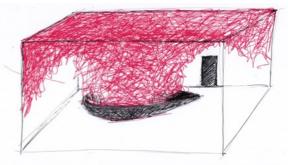


【常設作品】

■2021年4月1日(木)より公開

塩田 千春 《水の記憶》

本作品は、十和田市現代美術館の常設作品のための新作です。作家塩田千春は十和田市に作品を展示するにあたり、「十和田湖」に着想を得ました。十和田湖は 22 万年前の火山活動によって形成されたと言われており、水と深い関係を持つ十和田の地に、水に浮かびながら時間と記憶を運んでいく船をこの場所に繋ぎとめるように赤い糸で編んだ作品を展開します。インスタレーション作品の一部には、十和田湖で使用されていた船が使用されます。この船は、塩田の制作のテーマである「存在とは何か、生きているということはどういう意味なのか」や「私たちは何を求めて、どこへ向かおうと



塩田 千春「新作のためのスケッチ」

しているのか」という問いに寄り添っています。赤い糸は、血液や血管の体内を循環する小宇宙の象徴であり、人と人とをつなぐ 糸でもあります。糸はぴんと張られ、絡まっている部分もあります。その一方で、糸は切れることなくその関係性が続くことを 表しています。

塩田 千春(しおた・ちはる)



塩田 千春 Berlin, 2020, Photo by Sunhi Mang

1972年、大阪府生まれ。ベルリンを拠点に活動。

生と死という人間の根源的な問題に向き合い、"生きることとは何か"、"存在とは何か"を探求しつつ、その場所やものに宿る記憶といった不在の中の存在感を糸で紡ぐ大規模なインスタレーションを中心に、立体、写真、映像など多様な手法を用いた作品を制作。2008 年、芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2015 年には、第 56 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館代表に選ばれる。2019 年、森美術館にて過去最大規模の個展「魂がふるえる」を開催。また、南オーストラリア美術館(2018 年)、ヨークシャー彫刻公園(2018 年)、高知県立美術館(2013 年)、国立国際美術館(2008 年)を含む世界各地の個展のほか、国際展などのグループ展にも多数参加。

■2021年12月より公開予定

レアンドロ・エルリッヒ (建物―ブエノスアイレス)

体験型の大規模なインスタレーションで知られるレアンドロ・エルリッヒの《建物》を、 世界で初めての常設作品として展示します。今回、作家は故郷アルゼンチンのブエノス・ アイレスで馴染みのあるファサードを選びました。

鑑賞者は、鏡の効果によって、重力に逆らうように自由なポーズを建物の表面で取ることができます。シンプルなトリックでありながらも、現実ではありえない光景の中にいる自分自身の姿は、初めて目にする人々に戸惑いと驚きをもたらすでしょう。鑑賞者が作品の中に入り込むことによって成り立つ作品である一方で、ポーズを取る人々の様子とそれを内包した空間を観察する鑑賞者たちの存在など、鏡を介して複数の視点が存在する作品でもあります。



レアンドロ・エルリッヒ《Bâtiment》 2004, Nuit Blanche, Paris, France Leandro Erlich Studio ※参考作品

レアンドロ・エルリッヒ



レアンドロ・エルリッヒ ©guyot

1973 年アルゼンチン生まれ。ブエノスアイレス(アルゼンチン)とモンテビデオ(ウルグアイ)を拠点に活動。 コンセプチュアルアーティストとして、視覚的な構造を生かした作風は、目の前にある現実を捉え理解する能力を探り、見る行為の根本を問いかける。日常生活の中で見慣れた構造物はエルリッヒの作品に繰り返し登場するテーマであり、私たちが信じることと見ていることとの間に対話を生み出すことによって、美術館やギャラリーなどの空間と日常での経験との距離を縮めようと試みている。著名なインスタレーション作品《建物》(Nuit Blanche、パリ、フランス、2004 年)は、フランス、英国、オーストラリア、日本、アルゼンチン、ウクライナ、オーストリアなど世界各地で再制作されている。主な近年の個展に、「見ることのリアル」(森美術館、東京、2017 年)、「Liminal」(ブエノスアイレス・ラテンアメリカ美術館、2019 年)、「The Confines of the Great Void(太虚の境)」(中央美術学院美術館、北京、中国、2019 年)など。



十和田市現代美術館 広報:大谷(おおたに)

Tel. 0176-20-1127 Fax. 0176-20-1138 press@towadaartcenter.com www.towadaartcenter.com



【 寄託作品 】

十和田市現代美術館の倉庫を新たに改修し、寄託作品を展示いたします。当館での寄託作品の長期展示は 初の取り組みとなります。

※寄託とは:美術品の所有者が作品の所有権を留めたままま、美術館で展示、または保管すること。

■2021年4月1日(木)~2023年9月まで展示予定

名和 晃平 《PixCell-Deer#52》

名和晃平の代表作でもある「PixCell」シリーズの《Pix-Cell-Deer#52》の寄託を 受け、期間を限定し公開します。「PixCell」は、インターネットを介して集めた 動物の剥製や楽器などの物体の表面を、透明の球体で覆った彫刻作品です。私たちが ネットを介して見ている物体は、パソコンや携帯などの画面の細胞(セル)を介して 見ています。「PixCell」は、普遍的となっている情報社会の現状を彫刻作品として 表現しています。セルで覆われることにより、異なる物体でも同一の質感に変化 します。また、セルのレンズの効果によって、物体(の表面)は拡大され歪曲 されます。現物はセルを通してしか見ることができず、触覚的にも視覚的にも捉える ことができなくなります。



名和晃平《PixCell-Deer#52》 2018, mixed media h.2173 w.1896 d.1500 mm photo : Nobutada OMOTE | Sandwich Courtesy of SCAI THE BATHHOUSE

名和 晃平(なわ・こうへい)



彫刻家/Sandwich Inc.主宰/京都芸術大学教授。1975年生まれ。京都を拠点に活動。 2003 年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。セル(細胞・粒)という概念を機軸として、

彫刻の定義を柔軟に解釈し、鑑賞者に素材の物性がひらかれてくるような知覚体験を生み出してきた。近年 では、アートパビリオン「洸庭」など、建築のプロジェクトも手がける。2015年以降、ベルギーの振付家/ ダンサーのダミアン・ジャレとの協働によるパフォーマンス作品《VESSEL》を国内外で公演中。2018 年 にフランス・ルーヴル美術館 ピラミッド内にて彫刻作品《Throne》を特別展示。

【 関連イベント 】

塩田 千春 作品公開記念ギャラリートーク

日 時:3月20日(土)15:00-16:00

会 場:十和田市現代美術館 常設展示室、休憩スペース(カフェ)/ 料 金:無料 ※要常設展チケット

定 員:10名(事前受付優先)※記録映像を公開予定

※新型コロナウイルス感染症の影響により、開催内容が変更となる場合がございます。最新情報は美術館 web サイトにてご確認ください。

Arts Towada とは

十和田市ではより魅力的で美しい官庁街通りの景観を作り出すとともに、未来へ向けた新しいまちづくりの一環として「Arts Towada」計画に 取り組んできた。この計画は官庁街通りという屋外空間を舞台に、通り全体を一つの美術館に見立て、多様なアート作品を展開していくと いう世界でもまれな試みである。アート作品に加え、十和田市の歴史や美しい自然、そして地域のもつ活力を引き出し未来へつなげていく ような仕掛けを随所に盛り込むことで、十和田市を個性あふれる『アートの街』『感動創造都市』として国内外の多くの人々に印象づける ことを目指す。その中核施設となる十和田市現代美術館が 2008 年度に開館、引き続いて美術館向かい側の跡地の整備およびシンボルアート の設置を行い、Arts Towada は 2010 年春に完成。

十和田市現代美術館

2008年に東北初の現代美術館として開館。草間彌生、奈良美智、ロン・ミュエクなど世界の 第一線で活躍するアーティストらの作品を常設展示。美術館の中だけでなく、周辺に は公園のようなアート広場があり、子どもから大人まで散策しながら魅力あるアートとの ふれあいを楽しむことができる。

所在地:青森県十和田市西二番町 10-9

TEL: 0176-20-1127 FAX: 0176-20-1138 web: www.towadaartcenter.com



十和田市現代美術館 広報:大谷(おおたに)

Tel. 0176-20-1127 Fax. 0176-20-1138 press@towadaartcenter.com www.towadaartcenter.com



【 広報用図版 】

ご希望画像の作品番号に○を付けて、申込みフォームの項目をご記入の上、本用紙を E-mail または FAX にて お送りください。

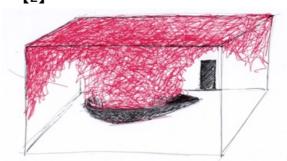
E-mail: press@towadaartcenter.com / FAX: 0176-20-1138

TEL: 0176-20-1127 / 住所: 034-0082 青森県十和田市西二番町 10-9 十和田市現代美術館 広報 大谷 行

[1]



[2]



[3]



[4]



[5]



[6]



[7]



(8)



(9)



媒体ジャンル 新聞/雑誌/美術誌/テレビ/WEB/その他()

御社名

御担当者名

所在地 〒

電話

メールアドレス

【 画像ご使用に際して 】

- ■クレジットは全て明記してください。
- ■トリミングはご遠慮ください。
- ■キャプション等の文字が画像に被らないよう、 レイアウトにご配慮ください。
- ■ご掲載の際は恐れ入りますが校正の段階で美術館 までご確認ください。